

▶ HSLA Steels'95 第3回国際会議に出席して ◀

長野工業高等専門学校 長坂 明彦

1995年10月25日から10月29日までの5日間にわたり、“HSLA Steels '95, The Third International Conference on High Strength Low Alloy Steels (HSLA鋼'95 高強度低合金鋼の第3回国際会議)”が中国金属学会(CSM)主催により、北京市内北西部の北京動物園にほど近い北京友誼賓館(Beijing Friendship Hotel)にて開催された。このホテルは1954年に建てられ、敷地33万5千㎡、建築面積32万㎡、1900室という中国らしく雄大で趣があり、国際会議会場としてはこの上もなく素晴らしい所であった。また、成田空港から北京首都空港間のフライト時間は約4時間で、時差は日本より1時間遅れであったことが私にとっては時差ボケもなく、誠にありがたかった。私は事前にタクシー(空港とホテル間の往復)と2人部屋宿泊をCSMに予約しておいたが、空港で予約したはずのタクシー業者に行き会えなかった。偶然、信州大学の留学生から中国の家族に荷物を依頼され、結果的に空港で待ち合わせたため、帰宅がてらホテルに寄ってもらってのスタートとなった。私自身中国へは今回で3回目であり、夏と冬を垣間見てきただけに秋の中国には興味津々であった。とにかく市内の道路が整備され、自動車の台数と高級車の増加に驚かされた。その後チェックインしてみると、同室になった人物は、34歳のチェコの民間研究員であった。彼の国では第2外国語が英語であった。馬が合ったせいか、会議中の行動はほぼ一緒であった。彼はホテル内の食事が高いことなどからお金を有効的に利用しており、ホテル周辺の商店から果物を含めた食料を買い込んでいた。私も彼を見習って買い込んだ。通貨は人民幣が使用できるようになり、二重為替制度(約3年前に来た時は兌換券であった)が廃止され、どこでも気楽に買物ができ、気分転換にもなり大変助かった。北京市内の物価は空港使用料などから比較して、日本の約1/2～1/3であった。

今回の会議全体への参加者はその一覧表から142名、参加国は19か国でその内訳は、オーストラリア(2)、オーストリア(1)、ブラジル(3)、カナダ(1)、チェコ(1)、フィンランド(3)、フランス(2)、ドイツ(4)、インド(4)、韓国(6)、ニュージーランド(1)、ルーマニア(1)、ロシア(1)、スペイン(3)、タイ(3)、イギリス(4)、アメリカ(5)、中国(91)そして日本(6)であった。最終プログラムから招待講演14件、一般講演68件の計82件であった。ちなみにこの会議の沿革は、第1回は1985年、第2回は1990年に続く3回目となり、5年毎に北京市にてそれぞれ開催されてきている。

会議は25日は参加登録、26日は午前9時からオープニングセレモニーが始まり、引続き午前中3件、午後1時45分から6件の招待講演が催された。夕方はレセプションが中華料理バイキング形式により盛大に催された。また27日は、午前8時30分から午前一杯まで5件の招待講演があり、日本からは両日で2件あり、荒木透先生と武智弘先生(福岡工業大学)がそれぞれ御講演され、その後の質疑で活発な討論をされた。そして、午後1時45分から“HSLA鋼のミクロ合金元素の挙動”、“冶金プロセス”、“腐食と機械的性質”の3会場に別れての平行セッションに移行した。各会場において計30件の一般講演が15分発表の5分質疑討論という形式で進行した。また、午後7時30分から北京美猴王京劇芸術団による中国オペラ“西游記”が催された。

28日も午前8時30分から“再結晶と組織”、“薄板・帯板・厚板”について2会場で、午後1時45分から“相変態・組織と特性”、“溶接性と多方面”の計38件が一般講演された。私は、28日のコーヒープレイク後の午後4時過ぎに“Warm Stretch-Flangeability of High-Strength TRIP-Aided Dual-Phase Sheet Steels”について口頭発表した。OHPシートは係の方がサポートしてくださり、時間節約につながった。予定通り約15分の発表後に2本の質疑を頂けた。しかしその質問に対して十分な解答ができず、チェアマンの武智先生に支援して頂いた。そして何よりも、発表後の拍手が嬉しかった。夕方のバンケットは盛大にして和やかに催された。円卓での中華料理は北京ダックまでのフルコースであった。各国が唄を歌うことになり、トップバッターはカラオケの元祖である日本が御指名され、武智先生御夫妻が『さくら』を日本語で御披露して下さいました。

最終日の29日はバス1台に乗り込み、見学会に参加した。中国北京北郊工芸美術厂(工場)、万里の長城、明の十三陵の順に移動した。今回で2度目の万里の長城を登ることになった。登りはじめて右と左に分かれるコースがあるが、前回は右側の一般コースであったので、同室のチェコ人を誘って、今回は左側の急登・長時間コースを選択した。最終地点まで行ってみると、その先は崩壊していた。少々寒かったが、天気も良く周りの景色も紅葉しており、発表から解放され最高の気分であった。

最後に、第25回日向方学術振興交付金の援助を頂き本国際会議に参加できたことを、日本鉄鋼協会ならびに関係者各位に深く感謝すると共に、本発表に際し終始温かく御指導頂いた信州大学工学部生産システム工学科教授・小林光征先生、助教授・杉本公一先生ならびに(株)神戸製鋼所の白沢省吾博士、橋本俊一博士に併せてお礼申し上げる次第です。(1995年12月26日受付)